
魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

【Nコード】

N5132Y

【作者名】

くま太郎

【あらすじ】

ルーンランド魔法研究所の所員イ・コージは独身・彼女なしの38才。

今日も無茶な依頼に振り回されて羽目に。

この作品は作者が書いているザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方のスピントフ作品です

イ・コージの日々(前書き)

ネタキャラから幕間主人公へ、そしてとうとうイ・コージはオリジナル小説の主人公になりました

イ・コージの日々

魔法王国ルーンランド

剣と魔法の世界オーディヌスで魔法に重きをおく国。

当然、魔法の研究には、かなりの力を入れている。

その中心はルーンランド魔法研究所、幾重物の魔法結界に保護された3階立ての建物は、広大な敷地に建っていた。

そして魔法研究所に1人の男が出社して来る。

ぽつちやり体型に短い黒髪に黒縁眼鏡、お世辞にも美男子とは言えないの容姿を持つ男の名前はイ・コージ。

38才独身彼女なし、ちなみに研究所には、つい最近スカウトされたばかりである。

前は違う国の魔法研究所で働いていたが、人にはあまり言えない理由で退職をした後にルーンランドの魔法研究所にスカウトをされたのだ。

中途採用とスポンサーのない哀しさかイ・コージにあてがわれている研究室は決して広くはない。

イ・コージは人より早く出社して研究室を掃除した後には研究室で朝飯を食べる。

朝食と言っても前の日に買ったパンとお茶だけの侘びしい物。

一人暮らしの侘びしい部屋で侘びしい食事をする位なら実験道具に囲まれて食べた方が、侘びしさも薄れるし時間短縮にも繋がるからである。

あらかた食事を食べ終えたイ・コージに1人の女性が声を掛けてき

た。

「またー研究室で食事ですかー？いいですけども栄養にも気を使つて下さいよー」

彼女の名前はリア・クローゼ、イ・コージの助手である。

年は二十歳と言うがボサボサの髪を紐で結わえ、でかい眼鏡をかけて化粧もしていないから、それが本当かはどうかは見た目では分からない。

「リアさんおはようございます。栄養は昼にとりますから、それで今日は新しい課題は届いていませんか？」

イ・コージの様な新参者が好きな研究を出来る訳がなく貴族や商人からの依頼をこなしていくしかない。

「来てますよー。今回は騎士団から研がなくていい剣を作つて欲しいそうですー。お坊ちゃま達は武器の手入れより髪や服の手入れが大切なんですよねー」

リアが言っているのは決して悪口ではなく、魔法王国のルーンランドにおいて騎士を目指す貴族は少なく才能ある者は宮廷魔術師やルーンランドが誇る魔術師隊を目指す。

従つて騎士団は自然とお飾り的な物に落ちぶれていた。

口の悪い国民から言わせるとお花畑騎士団、頭の中がお花畑で、見た目の美しさにこだわり手間も懸かる所がお花畑と言われる由縁だ。

「これ以上剣に新しい魔法を付与するのは、きついですね」

少し前に騎士団からの依頼で剣に軽量化や熱撃の魔法等を付与したばかりである。

一時的な魔法と違いイ・コージに求められるのは半恒久的な魔法効果。場合によっては剣に触媒を埋め込んだり魔法文様を刻み込む必要がある。

従って過度の魔法付与は剣の耐久度を著しく下げかねない。

(泊まりですね…)

イ・コージはとある事情で貴族嫌いになっていたが、ルーンランドに来てからの無茶振りの連続でさらに貴族嫌いに拍車がかかった気がする。

side リア・クローゼ

(イ・コージさんも、こんな無駄な依頼断ればいいのに)

お花畑騎士団に便利な装備を与えても精々貴族が集うパーティで自慢するしかないのだから。

もつとも全く無駄だと言う訳ではなく、イ・コージの技術を利用した品を魔法研究所では販売しており、その利益は研究所だけでなくルーンランドの国庫も潤していた。

実際にイ・コージがルーンランドに来て最初に手掛けたマジックアイテム”ゴブリンバイバイ”はゴブリンの被害を激減させただけでなく、今や重要な輸出品の1つとなっているのだから。

つまり今回の装備も有用ならルーンランドにおいて、実質的に直接攻撃をになっっている傭兵隊に格安でまわされる事になる。

（さてイ・コージさんは今回どんな魔法を使ってくれるんでしょうねー）

恋よりオシヤレより魔法に興味があるリアにしてみれば次々に新しい工夫を見せてもらえるイ・コージの研究室は理想の職場であった。

side イ・コージ

哀しいかな。弱小研究所、イ・コージは1つの仕事だけに関わっている事ができないでいる。

研究室には騎士団や傭兵隊から依頼されている装備品が魔法付与待ち状態にされていた。

「イ・コージさん、新しい依頼は上手くいきそうですか？」

「所長おはようございます。とりあえず構想はありますので、定時の仕事が終わりに次第取りかかりますよ」

イ・コージに話し掛けてきたのは魔法研究所の所長ヤ・ツレ。

イ・コージは、これほど名を体で表している人間を見た事はない。細すぎる体に薄くなった髪は、正にやつれた感じがしているし、年は40を少し越えた位な筈であるが、そのやつれ感からか下手をしたら老人にも見えたりする。

「すみません。我が研究所で一番の功績がある魔術師に報いる事が出来なくて」

そう言うトヤ・ツレは薄くなった頭をイ・コージに下げてきた。

「止めて下さい。所長が誘ってくれなかったら自分は、この世にすらいらないんですから、それに有名になんてなりたくないですし」

（相変わらず油断がならないお人だ。下手に急かせないで、こつちが自主的に徹夜する様に仕向けるんだから）

事実ヤ・ツレは権謀術数に長けており自分の悲哀たっぷりな容姿さえ平気で武器にしてしまう。

忙しい所長がわざわざ自分の所に、来た所をみると、今回の依頼はそれなりに急ぐ物らしい。

「とりあえず来月にお城で開かれるダンスパーティーにまで形してくれたらいいですから」

つまり、騎士団のお坊ちやま達は剣の手入れに掛ける時間をダンスパーティーの準備に費やしたいらしい。

（恩ある所長の髪の為にも頑張るとしますか）

決意を新たに装備品に魔法を付与していくイ・コージであった。

イ・コージの日々(後書き)

2作同時連載を頑張ります

イ・コージの望み（前書き）

1日でお気に入り登録が40を越えていました
イ・コージ最初はネタキャラだったのに感謝です

イ・コージの望み

side イ・コージ

真夜中の研究室で中年の男が机の上に置かれた物をジッと見つめていた。

これしかないですよ。

依頼からは些か離れていますけども、使い勝手とかを考えると、これが一番ですよ…。

(明日リアさんの反応を見てから決めますか)

イ・コージは冷たい床に寝転がってぼつちやりした体を毛布で包むと眠りについた。

side リア

それを見た時にリアは頭を抱えなくなった。

一応は尊敬をしている上司が研究室の床で寝ていたからである。

(この人は私がいなきゃ研究室に住み着ちゃうんじゃないかな?)

自分も同い年の女の子に比べたら自己に対する関心が薄いほうではあるけども、この上司にはもう少し自分自身を労る気持ちを持って欲しいと思う。

そんな事より、今私がいなきゃいけないのは

「イ・コージさん起きて下さいー。風邪ひいちゃいますよー」

「ふえ、あっリアさんおはようございます」

流石のイ・コージさんでも熟睡は出来なかったらしく、どこか眠たそうだ。

「こんな生活をしていたら体を壊しちゃいますよー」

「ははっ、誰かに心配をしてもらえるなんて久しぶりですね」

それ位でそんなに嬉しそうに笑わなくてもいいのに

「そりゃ同じ職場の人が床で寝ていたら心配しますよー」

「デユクセンに居た頃に研究室で寝ていたら心配より先に研究結果を盗む同僚ばかりでしたから、リアさんそれよりこれを見て下さい」

イ・コージさんが差し出したのは、何の変哲もないフェルト布。

「フェルト布ですよ。これがどうかしましたかー？」

「よく見て下さい」

そう言われてフェルト布を良く見ると布と同じ色の糸で刺繍が施してあった。

「これは魔法陣ですか？」

それにイ・コージさんが刺繍したの？

真夜中の研究室で1人で？

「羊毛に圧力の魔法を掛けてフェルト布を作り、魔力を通わせた絹糸にサビ除去と研磨の魔法陣を刺繍してあります。これを鞘の内部に張り付けるに予定です」

剣を抜く度に剣が磨かれる訳ですか。
でも

「騎士団の中には鞘に宝石とかをはめ込んでいるお馬鹿さんもいますよー？それをバラして内側に張り付けるのは難しくありませんかー？」

「そんな人には従者さんに直接拭いてもらうしかありませんね。でも軽く拭くだけで剣が輝きますから騎士団の人は自分で磨きたがるかと」

私も試しに預かっている剣をフェルト布で軽く拭いてみたら、手入れがあまりされていなかった剣が直ぐに輝きを取り戻したんです。確かにこれなら見栄っ張りの多い騎士団に受けると思いますー。

「汚れたら交換ですかー。洗ったら駄目なんですか？」

「洗うと刺繍が崩れちゃうんですよ。それに貴族の皆様なら買い換えてくれるじゃないですか。軽い魔力があれば誰でも縫えますから雇用にも繋がりますよ」

「随分と気を使いますねー」

イ・コージさんは使い勝手だけでなく製造方法まで考えるなんて。

「私の名前が出なくても責任は取られますからね。出来る事はしておきたいんですよ。」

それで功績と利益は研究所の物なんですよー

「でもこれだと真似されちゃうじゃないですかー？」

「大丈夫ですよ。最後の防刃の魔法は研究所で付与しますから」

手抜かりはなしですか。

結果、フェルト布は騎士団や傭兵隊に大好評になりました。

中には鎧や兜まで磨く人も出て来て、ルーンランドでは汚れ1つない装備をしてる者をフェミニストと呼ぶ様になった程ですから。

side イ・コージ

なぜか所長のヤ・ツレさんから呼び出しをされました。

何か苦情が来たんでしょうか？

まさかの退職勧告じゃないですよね？

「失礼致します。イ・コージです」

幸い所長室は穏やかな雰囲気です。

でも穏やかな雰囲気からの退職や訓告も良くある話。

「イ・コージさん良く来てくれました。フェルト布の評判とても良

「いですよ」

良かった、悪い事ではなさそうです。

「それなら幸いです。それで何の御用でしょうか」

「そんなに緊張しないで下さい。イ・コージさんの評価が高まったから何かプレゼントを贈りたいと思いましたが。例えば君好みの美しい助手でも構いませんよ」

美しい助手が来た所で何もありませんから、それはいいですね。

「それなら欲しいモノがあるんですが……」

side リア

「研究室の引越しですかー？」

「ここは手狭ですからね。こないだのフェルト布のご褒美として広めの研究室をお願いしたんですよ」

イ・コージさんは嬉しそうに話しているけども、ゴブリンバイバイや今回のフェルト布の売り上げを考えると何とも慎ましい願いなんですけど

「それで良いんですかー？自分好みの女の人を助者として囲っている人もいますよー」

「何を言ってるんですか？そんな事したら目立つでしょ、それに

私にはそんな度量も器量もありませんから」

確かにイ・コージさんの立場を考えると目立つのを避けたいのは分かりますけど、そんな情けない事を堂々と言わないでも

新しい研究室を見ての感想は1つ。

(イ・コージさんは研究所に住み込むつもりですね)

だって個室にベットもあるしキッチンまであるんですから

「111いいでしょ。ここなら安心してグッスリと眠れます」

そうですね。

ここはルーンランドの心臓部ですから他国の人間が無断で入るのは、ほぼ不可能ですもんね！。

イ・コージさんは見つかる心配がありませんもんね。

イ・コージの望み（後書き）

同僚やら上司とかをだそうかと、そこでサラリーマンの愚痴を募集
します

ザコ以上に男性向け小説になる気が

上司を選べないのがサラリーマン(前書き)

なんとこの作品が日別で7位になってました
いいんじゃないか？

上司を選べないのがサラリーマン

魔法研究所は研究開発部・商品作成部・販売部・総務部に分かれています。

私がいるのは研究開発部第2課。

第1課は自由研究をしており、私がいる2課では研究所に届いた依頼に対応しています。

「イ・コージちゃん、こないだのフェルトにクレームが来たからなんとかしてちょうだい」

私に嫌味にたつぷりに話しかけてきたのは2課の開発主任テガ・ラパクーリさん。

いやテガさん、フェルトの開発責任者になりたいって騒いだのは貴男じゃないですか？

「わかりました、届いたクレームを見せて下さい」

……

・フェルト布でこぼしたワインを拭いたら使えなくなつぞ。新品と取り替える

・剣を磨いたら鋭くなりすぎて指を切っちゃったじゃないか

・銀のフォークを磨いたら大事なお皿に傷がついたんだ。ママに叱れたら責任を取ってくれよ

これはクレームなんでしょうか？

それとも笑いを取りたいんでしょうか？

そんな事よりテガ主任、開発責任者になつたんだから、これ位の苦

情はなんとか宥めて下さい。

「嫌味ネズミが来てましたけど、何かあったんですかー？」

リアさん、確かにテガ主任は痩せていて出っ歯でネズミみたいな顔ですけども嫌味ネズミはまずいでしょ。私は眼鏡ブタとかデブ眼鏡とか言われてるんじゃないかと心配になりますよ。

「これです」

クレームをリアさんに手渡すと

「嫌味ネズミはお馬鹿貴族のお守りも出来ないんですかねー？」

どうして女の人って、相手がいないと好き放題に言えるんでしょうか？

聞いている私の胃がもちませんよ。

「作ったのは私ですから私が何とかしますよ」

実際に私が何とかするしかないですし。

通常業務がありますから今日も徹夜ですね…

ベットが早速役に立ちました。

そう喜んでおきましょう。

side リア

テガ・ラパクーリ35才。

ラパークリ男爵の長男で、それなりの魔力はある男。男爵は一代爵位だから、ごり押しに近い形で研究所に就職したみたい。

出世の基本は他人の禪な嫌味ネズミが次に目を付けたのはイ・コージさん。

ヤ・ツール所長がイ・コージさんの实力を知っているから、良いよ
うな物のそれじゃなかったらリア特製のネズミ捕りを設置していた
と思う。

「イ・コージさんおはようございます。お馬鹿対策はできましたか
ー？」

「ええ、ちょっと虚しい感じもしますけどね」

そう呟いたイ・コージさんの目の下にクマが見えました。

これは嫌味ネズミへの仕返しを考えなきゃ。

差し出されたフェルトを見てみたんだけども

「何も変わっていない感じがしますけど」

「変えたのは裏ですよ。ひっくり返してみてください」裏側には細か
い注意書きが書かれていました。

・本品を本来の使用目的以外に使うと性能が著しく劣化するので「
注意下さい

・本品を使うと剣が鋭くなりますのでご注意ください

・本品は装備品のみにご使用下さい

……イ・コージさんお疲れ様です

side イ・コージ

ホツとしたのも束の間、テガ主任がまたやってきたんです。思わず主任の仕事の心配をしてみましたよ。

「イ・コージちゃん。今ヒマだよ、そうだよ、僕今日行かない所があるからさー、これを頼むね」

テガ主任が研究室に置いていったのは宝石が散りばめられ、美しい装飾が施された立派な盾です。

感動するぐらいに見事な丸投げですね。

「主任、これは一体なんでしょう？」

「それに軽量化・威圧・疲労回復の魔法を付与してちょーだい。材料は揃えておいたから明日までに頼むよ」

ああ、そう言えば誰かがテガ主任はレディスクラブに目当ての女性が出て通い詰めているって話をしていましたね。

既婚者で、その元気はある意味うらやましいです。

.....

ざ、材料不足です。

軽量化に必要な魔石がないじゃないですか！

私に魔石を精製しろって言うんですか。

テガ主任が若い娘とお酒を飲んでいる時に私は実験器具とニラメツ

コ…

ちよつとだけ泣きたくなります。

そんな時です、研究室の扉が開きました。

「もうイ・コージさん嫌味ネズミの仕事に、そんな真面目に取り組む必要はないですよー。どうぞご飯食べてないんですよ。サンドイッチを作ってきたから食べて下さいー」

「リアさん帰ったんじゃないですか？」

「事務にいる友達から聞いたんですよー。嫌味ネズミがイ・コージさんに自分の仕事を丸投げしてレディスクラブに行っただってー」

恐ろしきは女性の噂包囲網。

「やっぱりそうでしたか？まっ家に帰ってもする事がありませんから」

「嫌味ネズミは今頃レディスクラブで鼻の下をのばしているんですよ。悔しくないんですか？」

だからって、リアさんが怒らなくても

「ちよつだけ悔しいですよ。でもその女性はテガ主任と談笑してるんじゃない、テガ主任のお金と談笑しているんですから。それに気付かないテガ主任こそ哀れなんですから」

研究者は何時も事実を見なきゃいけません。
昔、痛い思いをした私だから言えるんです

「随分とお人好しなんですネー」

違いますよ、そう思わなきゃやってられないんです。

「それにリアさんの優しさがこもったサンドイッチの方がレディスクラブのお酒よりも何倍も価値がありますから」

「サンドイッチで、そこまで喜ばれるとは思っていませんでしたよー」

故郷に帰れない私が女性の手作り料理を食べるのは奇跡に近いんですから

上司を選べないのがサラリーマン（後書き）

次はザコのシャルレーゼ女王とガークのひいおじいさんの話を更新
予定です

書きためができた時点で更新します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5132y/>

魔法研究所 中年所員イ・コージの日々 ザコ 勇者 番外編

2011年11月16日22時12分発行